≪研究ノート≫

木喰仏と宝珠

―特に子安像の形態について―

武庫川女子大学准教授　生活美学研究所研究員　藤　井　達　矢

1. はじめに

江戸後期の遊行僧木喰上人（1718-1810）は、行道・五行菩薩から明満仙人と名乗った時代を通して 1000 体以上の木造仏を遺している。現存するものは 600 体以上あり、そのうち子安地蔵菩薩は 17 体、子安観音菩薩は 21 体となっている。そしてそのすべてが、子どもを抱いている。うち一体が、本学にも近い兵庫県猪名川町の東光寺に遺されている。柳宗悦には遅れたが、この猪名川で昭和 26 年（1951 年）に粟野頼之祐によって見出された木喰仏は実に 26 体。その一つが木喰上人円熟期である文化 4 年（1807 年）作の「立木子安観音」図 1)である。境内の樫の幹に直接彫ったもので、明治時代の落雷で枯れたために現在は観音堂に納められている。落雷を受けた霹靂木（へきれきぼく）として神が宿った霊的なものと捉えられ、永く猪名川町の人々に愛され続けている。この像も、古くから行われ広く民衆に伝播した子安信仰を踏まえて、木喰上人が子どもそして母親のことを想い彫ったであろうことは想像に難くない。

しかし子安に関する木造仏像一般について木喰上人のそれと他を比較した時に、明らかな差異がある。それは、抱かれた子どものほとんどが手にドラゴンボールのような丸い何かを持っていることである。円空や木喰の研究で知られる小島梯次も「木喰の全ての子安観音菩薩像に共通する疑問であるが、子供が持っているものは一体何であろうか」[1)]と述べている。庶民の中にあって、そこで求められる仏像を短期間で彫り遺す、時として一日で完成させるというスタイルであり、また木材を厳選できる状況にもないわけで、正統な仏師同様の緻密な表現が難しいこともある。子安観音・子安地蔵の抱いた子どもの手の先の造形が不明瞭となるのも致し方ない。

何かを持っている例が木喰仏以外にないわけではないが、木彫の仏像としては非常に珍しい。多く見られるのは、合掌をしていたり、授乳中のものであるが、地蔵菩薩に至ってはその手に子どもを抱かないものも多い。今でこそ童子形の仏像や子どもが手に何かを持つ形態は、仏師の自由な発想によって数多く見られるが、当時はまだ珍しいものであった。木喰上人が、ある意思を持って一貫して「丸い何か」を抱かれた子どもに持たせることをしたと考えるべきであろう。しかし柳宗悦に見出されて以来、この丸いものは何であるか、朧げに「～であろう」と触れられることはあっても、個別に明解に議論されたことがない。そこで、木喰の足跡を辿り、その行為を一貫して行った背景と丸いものが何であるかを明

らかにすべく考察を試みた。

2. 「丸」へのこだわり

この丸いものは何なのだろうか。子安観音のもとになったのが中国の慈母観音であるとか、インドの鬼子母神[図2)]にも似ているといわれる。しかし前者に直接の糸口は見当たらなかった。一方で鬼子母神（訶梨帝母（かりていも））の多くは柘榴を持っており、抱かれた子どもも時にそれを手にしていることが認められる。日蓮宗では重要な柘榴。自身は真言宗でありながらも宗派にこだわらず、山梨県身延町の金龍寺で日蓮聖人像を彫った木喰上人。しかしだからといって、柘榴を子安観音・子安地蔵に再三再四登場させ、しかも子どもの手に持たせるという非常にインパクトの強い表象を行うまでの理由が見出せない。しかし一方でこのような伝承も残っている。

「弘法大師が、李密医の添書を持って唐に渡り長安で修業を終えて帰朝し、真言宗を伝えると共に二体の観音像をもたらした。一は鬼子母神であり、一は馬攄観音（ばれきかんのん）であった。」[2)]

あくまでも伝承であって真偽のほどは確認する術もないが、真言密教に立脚した木喰上人が遊行に出るまでの修行のなかでこれに触れる機会もあったであろう。

さらに、木喰上人の和歌には「丸」にまつわるものが多くある。

「るりの玉　みればみるほど　まん丸に　おれが心も　にたりやつたり」

「みな人の　心ごころを　丸ばたけ　かどかどあれば　ころげざりけり」

「講中の　心もここに　丸畑　十三ぶつの　心なりけり」

「みな人の　心をまるく　まん丸に　どこもかしこも　まるく　まん丸」

「まるまると　まるめまるめよ　わが心　まん丸丸く　丸くまん丸」

「唯心　心の月を　まん丸に　いつもすずしき　十五夜の月」

「嵐たち　うしほのくもを　ふきはらひ　あらはれ出る　月の丸さよ」

この他にも満月を歌ったものが複数あり、柳宗悦はこれらを「満月を好む上人は『丸』の字を愛した。ここに円融の教えが平易に説かれてある」[3)]と説明する。円融とは仏語で、各々がその立場を保ちながらも一体となり、互いに融和し障りがないことをいう。柳はさらに、この「丸み」は木喰仏のいたるところ、例えば頭にも頬にも耳たぶにも鼻にも顎にも見られるという。正統な仏師ではない故の技術的な問題もあったことは否めないが、素朴な曲線が親しみやすさにつながっている。特に晩年の円熟期に遺した自刻像[4)]の目元・口元にある曲線[図3)]は、丸にこだわり円融を説く木喰上人自身の姿そのままであり、作仏聖として完結したことを意味する。この円融の教えを「丸」に乗せたことは、子どもが手にする丸いものとの親和性がある。

3. 地蔵菩薩のスタンダード

現存するか記録に残る木喰仏の子安像を年代順に並べてみると、安永 7 年（1778 年）北海道での子安地蔵を皮切りに 10 年以上に亘って 10 体以上の子安地蔵を作っている。そして子安観音の初出は寛政 4 年（1792 年）の熊本となり、それ以降はほとんどが子安観音となっている。子安地蔵から子安観音へと推移した要因は様々に考えられるが、まずは出発点となった子安地蔵菩薩そのものの原点に立ち戻ってみる。一般的に子どもを抱いていない像もあるとは先に述べたが、その代わりに右手には錫杖を、左手には宝珠を持つ。この姿が、地蔵菩薩としてのスタンダードでもある。儀軌[5]には子安地蔵・子安観音についての記述はないが、子安地蔵菩薩の原型になる地蔵菩薩については「左手宝珠を持し、右手錫杖を執持する形にす」[6]とある。子安地蔵菩薩にはこの二つを持った上で、子どもを抱く形態も見られる。であるならば、木喰仏に見られる丸いものを「宝珠」と解し、最も近い地蔵菩薩の手から子どもに手渡されたとするのが自然ではないか。

4. 真言宗の僧として

庶民の中に入り込み宗派を超えて柔軟に仏像を彫ってきた木喰上人であるが、真言宗の僧であるという立ち位置を揺るがすものではなく、その範疇で真摯に行を重ねたと考えられる。

梅原猛は柳宗悦が、木喰は八宗一見[7]の僧であると解し、その作仏を耽美的に評価したことについて木喰上人の和歌を挙げて異論を唱えている。

「念仏に　こゑをからせどおともなし　みだとしやかとは　ひるねなりけり」

「ざぜんして　ものをいはぬかあほうもの　己の心　みつけざりけり」

これらには、他宗に対しての皮肉が込められている。木喰上人が自らを八宗一見であると称していたことは事実であり、木喰仏の背銘にも「八宗一見」の文字が記されている。しかしこれはあくまでも権威に溺れた各宗派の在り方と決別してあくまでも庶民に寄り添うという道を選んだ結果辿り着いた立ち位置であって、真言密教そのものを他宗と同等に扱っているわけではない。その底流には、常に真言密教の教えが見える。このことを示す一つの裏付けを木喰仏から得られるのだが、これについては後に述べる。

そこで忘れてはならないのが、真言密教において宝珠信仰が非常に重要な意味を持つということである。高野山、室生寺の五重塔の西側に「如意山」がある。弘法大師・空海が、師事する恵果阿闍梨（けいかあじゃり）より授かった如意宝珠をこの山の頂上に埋めたのであり、昭和 21 年（1946 年）の発掘調査では石造納経塔から琥珀の玉をはじめ貨幣や巻物などが見つかっている。これを象徴として如意宝珠による各種の修法が重視されており、真言宗寺院の中には如意山に向かって修法を行うところもあるという。天明 7 年（1787 年）2 月 5、6 日に木喰上人が高野山に至ったことは上人が記した南無阿弥陀仏国々御宿帳で確認できるが、万

感の思いで登拝したことであろう。以上のことからも、庶民を慈しみ、庶民の思いに寄り添ったであろう木喰上人が、彼らを癒し彼らの願いを叶えるために、シンボルとなる宝珠を子どもの手に委ねたとは言えないか。

5. 宝珠のカタチから

ここまでで、子どもの手にしている丸いものが宝珠であろうということが確かになってきたと言えるが、さらに宝珠の形から捉えてみる。木喰上人の彫った子安像は一様に丸いもの（宝珠であろう）を持っているのだが、静岡県の蓮華寺にある子安地蔵菩薩[図4)]だけは瓢箪を持っている。瓢箪は古来縁起の良い形として日常生活や信仰に用いられてきたが、仏教においては真言宗の開祖である弘法大師（空海）が中国に学んだ「如意宝珠の修法」に由来している。如意宝珠を二つ重ねる形を瓢箪になぞらえ、京都の福勝寺には「宝珠尊融通御守」という瓢箪の御守が伝わっている。太閤秀吉がこの融通尊に帰依したことでも知られ、「ひょうたん寺」の愛称も持つ。このように、木喰上人が子どもに抱かせた瓢箪は決して特異なものではなく、あくまでも宝珠の一つとして表現されたと言えよう。なお、この瓢箪には酒が入っていて、抱かれた子どもは木喰上人自身との解釈もある。確かに四国堂仏の一つである自身像の足元には大きな瓢箪が刻まれ、そうしたイメージを重ねた可能性は高い。さらに享和 1 年（1801 年）作の子安観音（山梨）では、抱かれた子どもの顔が妙に大人っぽく、その手には瓢箪と杯を持ち正に口に運ぶ瞬間なのである。木喰上人自身のユーモア溢れる表象であり、職人的な仏師とは一線を画したアーティストの様相をも示している。いずれにせよ木喰上人にとって、般若湯を入れた瓢箪こそが宝珠であったのだろう。

木喰仏の中で子どもが持つ丸いものの形を確認しやすいのが、愛知県の徳蔵寺や静岡県の梅林院にある子安観音菩薩[図5)]、そして静岡県の十輪寺にある子安地蔵菩薩である。栗のように上方がやや尖った形となっており、段差を付けて表現している。この意匠は、宝珠そのものはもちろんのこと、玉・宝珠の系統の神紋や家紋にも多く見られる。家紋では様々なアレンジがあるが、「一つ焔の宝珠」[図6)]の中の宝珠の形が最も近いように思われる。一方で先端に段差がある宝珠を持つ仏像として参考となるのが、福井県の瑞伝寺にある子安地蔵菩薩坐像[図7)]である。右手に錫杖、左手に宝珠という定番のスタイルで、承元 3 年（1209 年）頃に作られたことがわかっている。次に、岐阜県の円明寺（真言宗）にある地蔵菩薩立像[図8)]である。こちらは平安時代の作とされ、宝珠を持つ左手首から先は後に修復されているというが、江戸期以前の仕事であろう。さらに、埼玉県の興徳寺にある地蔵菩薩坐像[図9)]は室町初め頃のものである。このように例を挙げればきりがなく、この形態が宝珠を表す一つの定型として一般化していたと言える。

6. 准胝観音と不空羂索観音

宝珠は真言密教で特に大切に扱われている。ここでは木喰上人が八宗一見を標榜しながらも、やはり真言密教を自らの拠り所としていた根拠を示したい。それによって、宝珠を特別に扱う木喰上人の視点が確かなものになる。

まず、木喰上人の和歌には多く「阿字観」という言葉が出てくる。阿字観とは、弘法大師によって伝えられた密教における瞑想法である。これについては柳宗悦も「彼は真言宗に僧籍があったが故に、心は深く阿字観に育てられた。阿字の一念を歌った彼の句は一二に止まらない」[8)]と述べる。

「阿字をみる　阿字に阿字ある　阿字なれば　しをみそなしに　くふかいの阿字」とはそのうちの一つである。「味」と「阿字」、「食う」を「空海」にかけるなど、平易な言葉の中に、子安観音にある宝珠から瓢箪そして般若湯や杯に至るのにも似たアーティストのユーモアがここでも感じられる。

次に木喰仏に多くある六観音の構成を分析した。まず儀軌にもある六観音について確認する。六観音とは、迷いある者が輪廻する苦に満ちた天道・人間道・修羅道・畜生道・餓鬼道・地獄道の六道においてそれぞれ担当の観音菩薩が救うというものである。密教においては天道を如意輪観音、修羅道を十一面観音、畜生道を馬頭観音、餓鬼道を千手観音、地獄道を聖観音があたるが、人間道だけは准胝観音の場合と不空羂索観音の場合がある。准胝観音は七俱胝仏母（全ての菩薩の母）とも言われ、腕は 18 本、除災・延命・除病・子宝・安産などのご利益がある。不空羂索観音は、腕は 8 本、羂索を持ち鹿革の袈裟を着ており、無病息災・平穏無事などがご利益である。

木喰上人はこれら六観音を多数遺しているが、その内訳は如意輪観音・十一面観音・馬頭観音・千手観音・聖観音そして准胝観音に限られる。つまり、人間道を担当する観音菩薩として不空羂索観音を一切作らず、准胝観音に徹したのである。儀軌に記されている腕の数やその他子細な特徴は簡略化されてはいるものの、人間道にはひたすら准胝観音を彫っている。これは同じ密教とはいえ、東密の真言宗と台密の天台宗との立場の違いに他ならない[表 1)]。

六観音の担当する人間道だけは、真言宗では准胝観音、天台宗では不空羂索観音なのである。近しい天台宗と真言宗であるが、先に挙げた木喰上人の和歌「念仏に　こゑをからせどおともなし　みだとしやかとは　ひるねなりけり」に示された無意味な念仏を、天台宗も修法に採用していた。こうしたことから、木喰上人は真言密教を真摯に追求しながら、庶民とのチャンネルを多く持つべく八宗一見を標榜し、遊行を重ねるうちに昇華し、遂には「仙人」を名乗るまでになったと言える。多宗の単なるいいとこ取りではなく、宗派に拘らない庶民とともにありながらも自身を育てた真言密教を土台にして到達した地平だったのである。

六観音に関連して、いかに木喰上人が子安観音への思い入れがあったかを物語る記録が

ある。文化 5 年（1808 年）に甲府の教安寺に七観音[図 10)]を遺したというのである。小宮山清三が大正 14 年（1925 年）に発見したが、残念ながら昭和 20 年（1945 年）の空襲ですべて焼失している。木喰上人は、そもそも仏教にはない子安信仰を持ち込み、既定の六観音に子安観音を加えて七観音としたのである。仏体裏には各々「如意輪観世音大士」「十一面観世音大士」「大バトウ観世音大士」「千手観世音大士」「聖観世音大士」「大ジュンテイ観世音大士」「子安観世音大士」と記されており、それらは「如意輪観音」「十一面観音」「馬頭観音」「千手観音」「聖観音」「准胝観音」そして「子安観音」である。人間道の准胝観音にも子安の側面はあるが、さらにそこに子安観音が加えられるわけで、衆生を救う力が増強されたことにもなろう。当時の写真を見ると、子どもが一際大きな宝珠を手にしている[図 11)]ことがわかる。七観音とは本来は真言宗でいうところの六観音に、天台宗での不空羂索観音を足したものであるが、あえてこの概念を曲げて表現したのである。晩年の作であり、真言密教に則った六観音に庶民信仰の子安観音を加えて七観音とするという大胆な発想こそ、木喰上人の辿り着いた境地であったと言える。

7. 宝珠の一般化

考察を進める中で、印象的な仏像との出会いがあった。京都市中京区裏寺町通の常楽寺に「夜叉身弟児地蔵（やしゃみおとこじぞう）」[図 12)]がある。高さ五十センチほどの木造で、鮮やかに彩られた七条袈裟を纏い、右手に錫杖、左手に子どもを抱き、その子どもが宝珠を捧げ持っている。由来が定かでなく、明治以降に修復も行われているというが、恐らく江戸期の仏像であろう。江戸以前のこうした形態の木造仏は、大変珍しい。常楽寺も度重なる大火や区画整理で移転を余儀なくされているが、江戸期には洛陽四十八願所地蔵巡りの第三十二番札所として賑わったという。霊元法皇（1654-1732）のものと伝わる「咲けば散る かみがたなれど 撫子の 華の弟児を 守る御仏」というご詠歌もあることから、この地蔵が江戸期に京の町で庶民に愛されていたと窺い知ることができる。

今でこそ子どもが手に宝珠を持つ新しい仏像を見ることは容易いが、当時としては珍しいものであったはずだ。しかし世の中が安定し、庶民の生活に身近な存在としてより浸透し、地蔵巡りの流行を見た江戸期にあって、この像を作った仏師がこの発想に至ったことに違和感はない。そして木喰上人は、京都を何度か訪れている。つまり、洛陽四十八願所地蔵巡りの名所を訪れ、この夜叉身弟児地蔵を拝んだこともあったと考えるのが自然であろう。

一方で庶民信仰、子安信仰に最も近いところにあるのが石仏である。五来重の『石の宗教』によれば、特に関東・東北に石造の如意輪観音が多数見られ左手に赤子を抱く像も多く、貧困故に間引きされた子どもの供養を行ったという。凶作が多く生産性の低かった東国にこうした石仏が多いのだが、女人講としてひっそりと行われたもので、罪の意識からか伝承がない。また五来は「地蔵と子供の関係も、仏説や地蔵経典によるものでなく、わ

が国の民俗信仰から出たものである」[9]「石地蔵というものは、けっして図像や仏画や木彫の地蔵菩薩を石像化したものでなく、もともと石の宗教性から地蔵が造型されたものである」[10]という。子育地蔵・子安地蔵の名で信仰されている地蔵は全国で見られる。これらの子安信仰には、木花咲耶姫（このはなのさくやひめ）に始まりその後の神仏習合と併せて切支丹との関係も生まれてくる。天文 18 年（1549 年）にフランシスコ・ザビエルが鹿児島に来着して以来、幾度となく出された禁教令、隠れ切支丹、幕末には禁教の緩和となるが、木喰上人の生きた時代はまだまだ厳しい状況にあった。聖母子像を想起させる石造マリア観音や石造マリア地蔵を、関東や九州でも見ることができる。そのすべてではないが、聖母子像と同様に子ども（イエス・キリスト）は手に丸い天球を持っている。それは柘榴でもあり、仏教の宝珠でもある。安永 2 年（1773 年）からの木喰上人最初の回国は、関東地方から東北へと歩いている。この時に、多数のマリア観音または子安観音石仏に触れている可能性は否定できない[図 13]。また木喰上人の子安観音の初出が寛政 4 年（1792 年）の熊本であることは先に述べたが、寛政 7 年（1795 年）の一年近くを長崎で暮らしている。これについて三田元鐘は「当時なお社会の関心事であった切支丹に対して上人が素通りした筈がない」[11]と述べている。木喰上人の和歌には「からからと　笑ふて入るも　たから舟　なさけの下に　見ゆる長崎」とあり、柳宗悦はこの宝船を南蛮船と解している。確かにこれ以降に、子安観音の制作が一気に増大するのである。

さらに木喰上人の足跡にはないが、兵庫県豊岡市岩中にある石造の子安地蔵大菩薩[図 14]は文化 5 年（1808 年）造立であり同時代のものである。1 メートル 50 センチ余の大きな石仏で、夫婦で旅の道中、岩中で突然産気づいた妻を村人が助け元気な男児を授かった御礼に、石工に作らせたものである。この像は右手に錫杖を持ち左手に子どもを抱く。そして子どもも右手に錫杖を持ち、左手には宝珠を持っている。子どもも既に地蔵菩薩となって後世にご利益を与えているのだが、江戸後期にもなると特に石仏では抱かれた子どもが手に宝珠を持つという形が決して珍しいものではなかったことがわかる。その前提として「平安末以降の長きにわたる修験者など遊行的宗教家の民間進出に伴い、如意宝珠の思想が普及」[12]していたことがある。庶民に近いところにいた石工が、寺院ではなく、庶民の暮らしのある路傍に造立する身近な仏像を庶民の望みを受けて作るからこそ、儀軌に囚われない柔軟な発想で彫ることができたと言える。（とはいえ、江戸時代の前半は特に石工の仕事が豊富で、収入には恵まれていたという）またそうした動きが、庶民の信仰の中で地域性を包含しながら独自の発展を遂げた。庶民の傍にいた木喰上人は、こうした石工と同様に新たなアイデアを形にするアーティストの側面を持っていたのである。

8. おわりに

子安観音菩薩・子安地蔵菩薩の子どもについて木喰上人が言及していない以上、その手に持つ丸いものを宝珠だと断言することは憚られる。しかし、宝珠を重視する真言宗であ

ること、またその形態や時代背景など、複数の状況証拠を確認した結果、やはり宝珠であると結論付けるべきであろう。子どもの手に持たせるという、当時皆無ではないとしても木造仏では稀有なことを一貫して行っており、そこに木喰上人の強い意志を見出すことができる。

如意宝珠は、母または父（造形上の特徴から、子安地蔵菩薩は父親、子安観音菩薩は母親との解釈もある）の手から子どもの手へ。そしてそれは無限の価値を持ち意のままに願いを叶える力を湛える。未来を担う子どもに夢を託す、この明解なストーリーこそ、木喰上人が刻もうとしたものではなかったのか。その象徴として、宝珠は子どもの手にあるべきだったのであろう。

13 歳にして山梨県の実家を無断で飛び出た木喰上人。江戸での奉公そして職にも就いた後に 21 歳で出家する。木喰戒を受けて、55 歳の安永 2 年（1773 年）から回国を始め、作仏聖として天寿を全うすることになった。しかし、回国を始めてから没するまでに 4 回の帰郷に止まっている。郷里での四国堂建立についての地域内での問題も目の当たりにする。この生涯に、上人の母そして父との関係や故郷への秘めたる思いを重ねて考えるのは不適切だろうか。般若湯を含みながら母（子安観音）の胸に抱かれる木喰上人（子ども）の姿に、天涯孤独の上人がひたすら衆生に尽くす、そうせざるを得ない心の内を見た気がするのは私だけだろうか。木喰上人が格別な思いを持って子安観音像を彫り、子どもの手に特別な宝珠を持たせた背景には、こうした自身の境遇もあったのではないか。

宝珠、円融、微笑と、「丸」を多層に重ね合わせることで、上人の作仏ポリシーがより明瞭に浮かび上がってくるであろう。鹿児島に多数残る石仏「田の神」に見られる屈託ない素朴な笑みは、木喰仏の「微笑」に通じるものがある。アルカイック・スマイルだけでは説明できない「木喰スマイル」とでもいうべき微笑が合わさった木喰仏。特に晩年にその笑みも深みを増すのだが、木喰仏の「微笑」についての検討は今後の課題としたい。

【注】

1) 大久保憲次・小島梯次 2008『木喰 庶民信仰の微笑仏』東方出版、p. 204
2) 三田元鐘 1975『切支丹伝承』宝文館出版、p. 104
3) 柳宗悦 1981『柳宗悦全集著作編第七巻』筑摩書房、p. 512
4) 「自刻像」とは、彫刻家が自身の容姿を彫刻作品として表現したもの
5) 「儀軌」とは、仏教における諸仏の造像や供養等に関するすべての規則、またはそれを記した典籍
6) 国訳秘密儀軌編纂局 2001『新編仏像図鑑 上』国書刊行会、p. 500
7) 「八宗一見」とは、平安までの倶舎宗・成実宗・律宗・法相宗・三論宗・華厳宗、これらに平安時代栄えた天台宗・真言宗を加えた八宗を網羅して一つに見ること
8) 柳宗悦 1981『柳宗悦全集著作編第七巻』筑摩書房、p. 23

9)　五来重 2007『石の宗教』講談社、p. 258
10）五来重 2007『石の宗教』講談社、p. 260
11）三田元鐘 1975『切支丹伝承』宝文館出版、p. 105
12）村山修一 1984「わが国如意宝珠信仰の歴史的展開」(『密教文化』No. 148)、p. 95

【参考文献】

粟野頼之祐 1967『北摂における木喰上人』北摂郷土史学会
梅原猛 1967『美と宗教の発見―創造的日本文化論』筑摩書房
日本民芸協会 1972『木喰上人　新装・柳宗悦選集 9』春秋社
三田元鐘 1975『切支丹伝承』宝文館出版
庚申懇話会 1975『日本石仏事典』雄山閣
柳宗悦 1981『柳宗悦全集著作編第七巻』筑摩書房
原田康次 1981『木喰』木耳社
山梨日日新聞社 1986『木喰の旅』山梨日日新聞社
国訳秘密儀軌編纂局 2001『新編仏像図鑑　上』国書刊行会
五来重 2007『石の宗教』講談社
大久保憲次・小島梯次 2008『木喰　庶民信仰の微笑仏』東方出版
小島梯次 2014『木喰仏入門』まつお出版
丹羽基二 2016『神紋総覧』講談社学術文庫
浜松市博物館 2016『浜松市博物館特別展　遠江の木喰仏　図録』浜松市博物館
NPO 京都観光文化を考える会・都草 2011『京のお地蔵さんめぐり　寺町通界わいマップ』NPO 京都観光文化を考える会・都草
村山修一 1984「わが国如意宝珠信仰の歴史的展開」(『密教文化』No. 148)
栗田美由紀 1999「猪名川町の木喰仏－調査概報－」(『奈良大学文化財学報』第 17 号)
中村本然 2005「真言密教の修法と如意宝珠」(『高野山大学密教文化研究所紀要』第 18 号)

【表】

表 1「六観音」

	天道	人間道	修羅道	畜生道	餓鬼道	地獄道
真言宗	如意輪観音	准胝観音	十一面観音	馬頭観音	千手観音	聖観音
天台宗	如意輪観音	不空羂索観音	十一面観音	馬頭観音	千手観音	聖観音

【図】

出展

図 1)、図 3)、図 12)、図 14)　筆者撮影

図 2)　天台寺門宗 2010『天台寺門宗 平成 23 年カレンダー』天台寺門宗

図 4)　大久保憲次・小島梯次 2008『木喰 庶民信仰の微笑仏』東方出版、p.43

図 5)　大久保憲次・小島梯次 2008『木喰 庶民信仰の微笑仏』東方出版、p.41

図 6)　筆者作成

図 7)　小浜市教育委員会

図 8)「祇是未在 ソゾタケの仏像日記」butszo.jp

図 9)　さいたま市教育委員会

図 10)「峡陽文庫」kaz794889.exblog.jp

図 11)　柳宗悦 1981『柳宗悦全集著作編第七巻』筑摩書房、p.201

図 13)「さわらびＹの歴史・民俗・考古探索ノート」sawarabituusin.cocolog-nifty.com

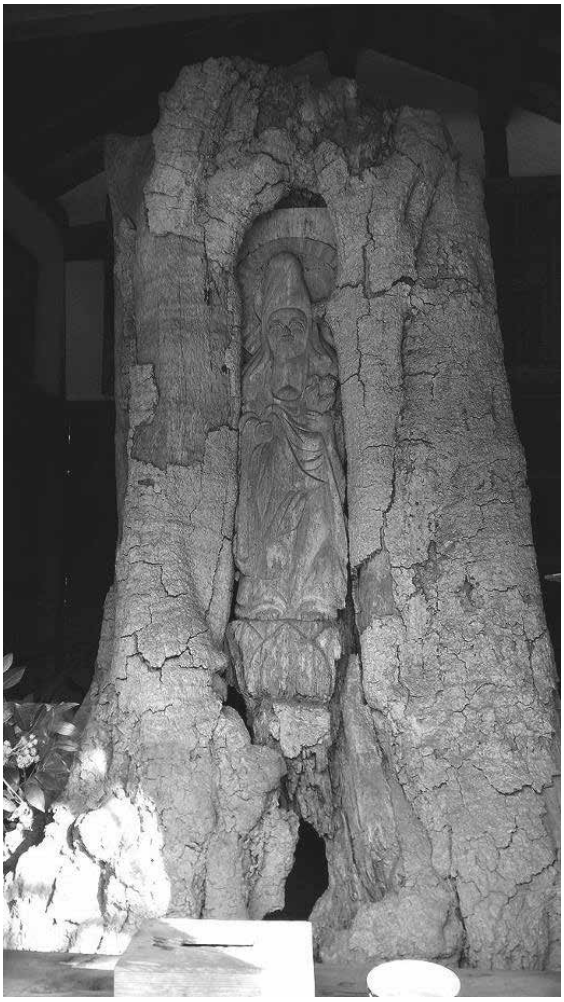

図 1　木喰仏「立木子安観音」（東光寺／兵庫）文化 4 年（1807 年）

図 2　「訶梨帝母倚像」（三井寺／滋賀）鎌倉時代

図 3　木喰仏「自刻像」（毘沙門堂／兵庫）文化 4 年（1807 年）

図 4　木喰仏「子安地蔵菩薩」（蓮華寺／静岡）
寛政 12 年（1800 年）

図 5　木喰仏「子安観音菩薩」（徳蔵寺／愛知）
寛政 12 年（1800 年）

図 6「火焔宝珠（家紋）」

図 7「子安地蔵」（瑞伝寺／福井）承元 3 年（1209 年）

図 8「地蔵菩薩立像」（円明寺／岐阜）平安時代

図 9「木造地蔵菩薩坐像」（興徳寺／埼玉）室町時代

図 10 木喰仏「七観音」（教安寺／山梨）文化 5 年（1808 年）

図 11　木喰仏「子安観音菩薩」（教安寺／山梨）文化 5 年（1808 年）

図 12 「夜叉身弟児地蔵」（常楽寺／京都）

図 13 「子安明神」（千葉県袖ケ浦市）元禄 4 年（1691 年）

図 14 「子安地蔵大菩薩」（兵庫県豊岡市岩中）文化 5 年（1808 年）